

- 三卷才十一号)同「今昔物語集における変体漢文の影響について」(「国語学」三十六輯)など。
- 門前正彦氏「今昔物語の文章おぼえがき―打消の助動詞連体形について―」(「解釈」昭和三十二年二月)があるが得られなかつた。

- 3 「文芸と思想」才十八号昭和三十四年十一月福岡女子大創立四十周年記念国語学国文学特集号所収。
- 4 「国語法論攷」六二一頁以下、
- 5 流布本を底本とした佐伯常磨校註の「校註平家物語」によつた。

- 6 「新文典別記」二四三頁
- 7 「ゴトシといふ語の形態と位相―今昔物語集の用例二三―」(「文芸と思想」才十八号)
- 8 この方面から文体を論じたものに、堀田要治氏の「如シと様ナリとから見た今昔物語の文章」(「国語と国文学」才十八卷才十号)がある。
- 9 「也字の訓について―「ぞ」と「なり」の消長(「国語国文」才二十四卷才二号)

- 10 7に同じ。
- 11 9に同じ。
- 12 9に同じ。
- 13 9に同じ。

古典文学大系「今昔物語集」で「ゴトキナリ」と仮名をふつてあるのは校注者がつけたもので原典にそうあ

- 14 るのではない。
- 14 「指定表現の様式―発生過程よりの考察―」(「文学研究」才五十輯)
- 15 春日和男氏の「ゴトシといふ語の形態と位相」の引用例を借用した。
- 16 15に同じ。

『紫式部日記』にあらわれた

紫式部の性格と心理ク

白 土 ルリ子

『紫式部日記』は、摂関制藤原政権の極盛期、道長の女である中宮彰子に仕えた紫式部が、その宮仕え女房としての見聞と折りに触れての感想をしるした断片的な記録である。この日記を基とし、始めより記事の区分に通し番号(①)～(㉑)をつけ、それを内容ごとに五つ(a)～(e)に分類し(詳細な分類内訳は省略)、以上を検討することによつて、天才作家として古来より世人に崇敬されてきた紫式部の心理、性格を身近なものとして再現してみたい。尙、分類内訳を簡単にまとめ次に掲げる。底本は池田亀鑑校訂

『紫式部日記』（岩波）使用。頁数は同書のものである。

(c)			(b)			(a)					
行	頁	通し 番号	行	頁	通し 番号	行	頁	通し 番号	行	頁	通し 番号
9	64	59 ：計十九項	6	10	3	6	11	53	8	11	2
			10	14	8	2	15	56	6	15	10
			9	29	24	2	15	66	3	18	11
			5	35	33	3	1	72	1	20	12
			1	38	37	10	6	74	6	20	13
			6	38	38	2	8	76	8	20	14
			10	41	43		10		10	22	15
			4	42	44		3		3	23	16
			3	73	67		9		9	24	17
				75	70		12		12	26	19
					：計十項		11		11	27	20
							5		5	30	27
							6		6	33	29
							2		2	34	31
							1		1	36	34
							3		3	47	48
							6		6	48	49
										49	50

(e)			(d)		
行	頁	通し 番号	行	頁	通し 番号
12	28	23	6	13	5
2	40	41	10	13	6
6	40	42	1	15	9
8	45	45	3	26	18
7	53	54	2	30	25
5	66	60	10	39	40
12	67	61	13	43	47
7	69	62			：計七項
12	69	63			
2	70	64			
12	70	65			

(a)、公的情景を描いた記事二十四項。
式部の周辺に起つた公的行事や儀式に対し式部はどの様な態度で処しているか。

④先ず気付く事は通説の如く、引つ込み思案であり、多分に内向的性格ではなかつたかという事である。それは華やかな公的場所を避けようとする式部の態度から伺える。例えば⑭御湯殿の儀の記事に次いで、その七日間の儀式が全てくもりなく只真白な部屋に行き交う人々の容姿や色合いまでがはつきり現われているのを見て「いとどものはしたなくて輝かしき心地すれば、昼はをさをささいです、のどやかにて東の対の局より、まうのぼる人々を見れば：」と、自己が浮彫りに現われる様な明るい人前に出る事は嫌つてゐる。又、⑯「十一日の暁、御堂へわたらせ給ふ。御車には殿の上、人々は舟に乗りてさしわたりけり。それに

は後れて、ようさり参る」。人々より後れて晚になつて参つたという淡々とした文章からも、常に人の後から、陰からこつそり、という目立つ事を嫌う式部が伺えるのである。この他①⑧⑨⑩の場に現われる式部の言動を見ても、彼女が公的場所、賑やいだ所を避けていたことは確實である。

⑨この式部の態度は如何なる理由に基づくものか。公的行事には全く興味が持てなかつたのであろうか。順を追つて眺めていくと、②五壇の御修法にしても、⑩⑪物怪調伏の祈禱の有様の記事にしても、僧正僧都達のそういう姿を常に尊いものとして見ているし多分に興味もあり好意的なのである。又、⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲の諸儀式の模様を詳細に記し、登場人物一人一人の服装から詳しく観察しているところを見ると、相当に強い式部の人事に対する好奇心、見聞欲も伺い知られる。これらは物陰からの観察であつたに違いない。だが一方では、⑩「いささかみじろぎもせられず、気あがりて、ものも覚えぬや」と、時と場合、その場の雰囲気によつては、全く無我夢中で皆と協調も出来る式部であり、④御前の試の折、隠れていたのを道長に引つ張り出され、気の進まぬながらも出て行けば、「夢の様に見ゆるものかな」と見る事も出来るのである。これらからみると、式部は公的場所そのものを毛嫌ひした訳でもない様である。とすると、①で指摘した様に、自己が浮彫り

に現われる様な明るい場所を嫌つたり、人々より後れて晚になつてから参つたという文章から、多分式部は白昼自分の素顔を人前にさらすという事がどうにも合点のゆかない事であつたのではあるまいか。これは当時の良家の子女が安易に人と顔を合せ、平気で口を利いたりすることはあるまじきことだとされていたその風習から考えると、式部のこうした態度もごく自然なものであつたとも思われるが、しかし当時の良家の子女皆が、そういう考え方を持つていたとは限らない。とするとこれも式部の性格の一面だと云える。

(b)、私的情景を描いた記事十項

私的情景とは式部と某との会話とか唱和とか、そういうごく少数の個人的内容になつた場合を指す。故にこの項では主な対人関係を中心に考察を進めたい。

④道長夫妻との場合は、私的場面十項のうち六項にものぼる。それも道長との場が多く四項も占めている。殊に⑦の項になると事態は少々穏やかでなくなる。やはりこの項に關しては七論以来様々に議論されてきた。問題は、「夜もすがら水雞よりけに鳴くなくぞまきの戸口にたたきわびつる」という道長の恋歌に対し「ただならじとばかりにたたく水雞ゆあけてはいかにくやしからまし」と返歌した式部の気持である。『紫家七論』で安藤為章が節義無雙としたのに対し、或者はそれは捨てられて世の物笑いになる事を

恐れただと云い、又或者は道長の一顧を得た事を得意として書き遺したのだと反撥している。この項の解釈の相違によつて式部の性格も大きく左右されると思う。だがこれについては、やはり阿部秋生氏を始め、神田秀夫、石川春江両氏の「この一段は、道長から歌をよめと云われた話と同じ意味で書かれた」という考え方が一番穩当だと見たい。当時こういう男女の唱歌はほぼ日常的なものであつたとも考えられるし、式部の気持としてもまず悪い気はしななくとも、靡く靡かないが問題ではなかつた筈である。事実それは式部の倫子に対する態度でも決定づけられる。式部は自分を倫子と同等だなどとは少しも思つていない。⑧菊のきせ綿を倫子から贈られた式部は「菊の露わくるばかりに袖ぬれて花のあるじに千代はゆずらん」と非常に恐縮した思いやりのある返歌を詠んでいるのを見ても察せられる。式部が自らも道長に媚びてゆく程の人なら、そういう野心があれば、自然倫子とも反目する様になるのが人間の本能ではあるまいか。とすると、この日記の消息文中であれ程齋院方や清少納言を非難出来た式部である。これだけの日記中どこかそういう口吻を匂わせそうなものである。もしそれが出来ないとするれば全く倫子の事には触れないかである。だがチラチラ見える倫子の描写は実に好意的であり、氣を許し合つていることが感じられる。⑭雪が降つても共に雪見をすべき式部の居合せないのを惜しんで、倫子は

「まろがととめしたびなれば、殊更に急ぎまかて、疾く参らんとありしも空事にて程経るなめり」と、一時も式部を手離したくないと云わぬばかりである。それに対し式部は「戯にても、さ聞えさせ給はせしことなれば、かたじけなくて……」参内するのであつた。かように倫子に対して、あくまでも道長夫人として中宮の母上として距離を置いた鄭重さで相對している式部の態度から考えても、何で道長に對するよこしまな野心など感じ取られようか。式部は道長に對しても倫子と同様に、あくまでも主人として距離を置いた鄭重さで相對しているのである。しかしこれら主人としての道長夫妻に對する式部の鄭重な態度の中には、公的場所で見られなかつた、かなり自由な式部の意志表示を見ただ様な氣がする。

⑨ごく親しい女房友達との場。⑭その頃里に下つていた小少將とよく友情に答えた文を取り交したり、⑮里に下つた式部が寂寞たる思いに耐えかねて大納言の君を想う。そういう自分を「なほ世にしたがひぬる心か」と怪しみながらも手紙を書き交している。こゝに人を懐かしむ式部の性格の一端が覗かれ、こういう少數の親しい女房達との場に日々をなぐさめを見出していた様である。

(c)、人物批評十九項、

①道長一家（道長・倫子・彰子）評。彰子に関しては、この日記の発端の部分に、①御産も近付いた中宮の様子を

述べ、「憂き世の慰には、かゝる御前をこそ尋ね参るべかりけれ」と彰子に仕える喜びを漏らしている。道長夫妻には、彼等が皇子誕生を喜ぶさま、又それに引き続いた天皇行幸のめでたさを喜ぶさまなどを見ては、⑳「ことわりにめでたし」とか、㉑「いとめでたけれ」、㉒「いと心ことなり」と、心から同感し好意的である。だが一風変わった記事として、㉓道長が長男頼道に中務の宮をめあわせようと望み、式部も宮様齎負の者と見て親しくなろうとするのを、式部は「心の中には思ひ居たること多かり」と人事の煩わしい渦の中に巻き込まれることを迷惑がつている様である。斯様に式部は道長一家に対しあくまで好意的ではあるが、その愛情に溺れ切ることなく、その権威に圧倒されることなく、時には画然と自分の場を守っているのである。

㉔ごく親しい女房評。㉕仲の良い弁宰相の君の昼寝姿に物語の女を感じ起してしまつたり、㉖不幸で弱々しい少将と火取に温まりながら慰め合つたりしている。これらは批評の部には入らぬかもしれぬ。だが何であつても式部はその相手にかなり好意的なのである。

㉗疎遠な人々についての評。式部は自分と疎遠な人に対しては比較的冷淡（この項の用例省略）である。だが直ぐ自分を顧みて、相手が自分と何か似通つた所があると、たちまち同情したり、強く魅かれたりしている。しかしこの

傾向は誰でも持つものであり式部独得の性格とは云えない。それよりも、この項に現われた直ぐ自分を顧みる彼女の内省的性格を汲み取る事が重要であらう。

㉘齋院方評。㉙中将君という齋院方の女房が或人に宛てた手紙を内密に見せられ、その内容が中宮の女房など眼中に無いといつた様な全て齋院方ばめの書きぶりに、式部は内心穏やかでなく、齋院方を反撃し中宮方を躍起となつてゐる。即ち一体に中宮方が不活潑なのは「あまり物づつみせさせたまへる御心に、何とも云ひ出でじ。云ひ出でんも後やすく恥なき人は、世にかたはもの」と常に思召しておいでになる中宮様の御氣持の感化だと弁明している。だがその中宮様はあくまでも「御心あかぬ所なく、らう／＼しく心にくくおはします」と。こゝには式部の忠心が満ちている。式部は彰子をこの上なく愛し仕え、又その性格も日頃の彰子の考え方の影響を受けていたことも察せられるのである。

㉚清少納言評。全く辛辣な批評ぶりである。㉛「あだになりぬる人のはて、いかでかはよく侍らむ」。この口調には少納言の没落を現実に見ている者の感慨が感じられる。薄命な定子皇后と共にこの宮廷社会から姿を消した少納言に対し、これ程鋭く衝く必要があつたらうか。こゝには何か特別な個人的事情があるとみては如何であらうか。つまり式部はかつてはこの今の自分の位置にあつた少納言の幻

影に常に悩まされてはいなかつたか。少納言はその著『枕草子』によつても伺われることであるが、一切の暗い現実には眼をつぶり、華麗な宮廷生活の全的讚美者となる事に依つて自己の個性を思い切り伸長させた。否、伸長させ得る環境にもあつた。が式部の場合は違つていた。実は式部の登場そのものも道長が十余年前の兄道隆の模倣を思い立つに及んでの、はめこまれ役であつた。道長の頭の中には、ともすればあの明朗闊達な少納言の面影が生きていたと思う。だが式部はどうしてもこの上層貴族社会に同化する事は出来なかつたのである。少納言を見下し得る漢才は持つていても、宮仕え女房に転身出来なかつた式部は常に悩める存在であり、ひいては少納言という嘗ての存在を呪う様にもなつたであらう。しかも少納言の前例がかなりの成功を納めているとなれば、その責任上式部はその挙動を常に彼女と比較せざるにはいれなかつたらうし、道長や世間の期待にそう為にも本来の自然な自分が露出できず、かなり窮屈な宮仕え生活であつたと思われ。その鬱積した気持が少納言評に爆発したものとと思う。

(d)、全くの写実的記事七項

この項は式部の主観が現われていないので見るべきものはない。一つ注意を引くものとして、㉔参内も間近な中宮の御冊子作りを手伝う記事で、道長が折角調達してやつた當時では貴重品である紙筆墨硯の類を中宮は惜しげもなく

式部に下さる。それを道長が見咎めて「ものの隈にむかひさばらひて、かゝるわざし出ず」とたしなめはしながら直接自分からも下さる。といつた淡々とした文章である。常に自分の存在が気にかゝり人の思わくを気にした式部にしては、あつけない位の筆致である。そこには全く他人に対する堅苦しい礼儀や遠慮というものが無い。まさに道長一家に溶け込んでしまつている式部を見出す。

(e)、式部の思考の世界十一項

①『源氏物語』を通して。㉕式部の留守中道長に局をあさられ、『源氏物語』の草稿を持ち去られる。式部は「心もとなき名をぞとり侍りけんかし」と、自分の書いた物語がどんな評判を得、自分がどう思われるかを心配している。この心配については㉖「あはれなりし人の、かたらひし辺も、我れをいかにおもなく、心浅き者とや思ひ落すらんと、推し量るに、それさへいとばづかしくて、えおとつれやらす」と、自己の殻の中に閉じ込める原因にもなつていつた様である。

②夫宜孝の面影。㉗「：片つ方に文ども、わざと置き重ねし、人も侍らずなりにし後、手触る人もことになし」と、この日記中たつた一個所だけ、ふと漏らした宜孝への追慕。里に帰り、昔夫の触れた漢籍を静かにひもとく、それは式部の理智がさせる一方、宜孝という一つの郷愁をも思わせ、沁々とした心の安らぎを憶えたものではあるまい

か。親子程も年令の違ふ宣孝との結婚ではあつたが、学識を認め合い、熟慮の末行われたものであつた以上、それがわずか二年間であつたとは、式部も諦め切れないものがあつたに違いない。その亡き夫への切ない追慕が大作『源氏物語』を生む動機となつた事も事実であろう。こうした式部の様を見て侍女達は、「おまへはかくおはすれば御さいはすくなきなり。なでふ女が眞字書は読む。昔は経読むをだに人は制しき」と陰口を云う。どんなに物語作者として名声は上つても、家庭の女性として見た場合誰の眼にも式部は不幸と映つた様だ。

④宮仕え生活での悩み。④宮仕え前は「さしあたりて恥かし、いみじと思ひしるかたばかりのがれたりしを」、今の生活は「さも残せる事なく思ひ知る身の憂かな」と、恥かしい事悲しい事を全て味わい尽さねばならぬ現在の宮仕え生活をつくつく辛うと思つていた様である。それは、(54)「：思ひ出づればこよなくちなれにけるも、うとましの身の程やと覚ゆ」と、現在宮仕えに馴れ切つたものになつている自分が疎ましい運命の女である様に思われると云う式部は、いつまでたつても宮仕えに疑問を持つてゐるのである。

⑤他人の式部評を通して。⑥「いと艶に恥かしく、人に見えにくげに、そばそばしき様して、物語好みよしめき、歌がちに、人を人とも思はず、ねたげに、見落さんもの

となむ」。この式部評に対し彼女自身も「ただこれぞ我が心と、ならひもてなし侍る有様」と告白している。お高くとまつていて生意気だと云われることを式部は内心期待していた訳である。物語は順次好評を博し、その学識も買われていた時、どうしてこれ以上の偽装を必要としたのであろう。これは何か弱みを持つ人間がそれを人に知られまいために殊更演技してみせるのに似ている。では式部の弱みとは——彼女の過去には宣孝との結婚生活があつた。それは単調な退屈な生活でもあり、又当時の社会性から来る妻の位置の不安定さをもつくつく味わいつくした生活ではあつたらうが、いざ死別してみると何かしら日々の生活に空虚さが漂よつたことも事実であろう。それは宮仕え生活で消せるものではなく、かえつて外部とのわずらわしい接触のため心の奥に輪をかけて大きくなるばかりであつた。といつても直ぐに再婚を考える程式部は単純でもなかつた。

もう己に経験済みの結婚というものが彼女の今後の目的でもなかつたに違いない。この様な未亡人というどちらつかずの不安定さから来る悩みは消せるものではなかつた。そんな式部の様子は侍女達の眼からも明らかに推測する事が出来たのである。故に本来は気の強い負けず嫌いの彼女故に、こうした鬱々とした不幸意識を他人から知られ同情されることを恐れたと見ては如何であろうか。同じ同情されるにしても、せめて「学問するから不幸だ」と極め付けら

れた方が安堵したのである。

㊦才能に対する自負。彼女は自分の不幸感を教養ある者としての權威でカバーすべく陰ながら努力した。が自分からその学才を鼻にかけ学者ぶつていない事は知つて欲しかつたらしい。次の如きかなり極端な例で弁明している。㊧幼い頃、兄の式部丞が史記を読んでいるのを傍で聞いていて式部の方が憶えが良かったのを父が見て、「口惜しう男子にて持たぬこそ幸なかりけれ」と歎いた位だし、㊨男でさえ学才を鼻にかける人は不遇に終つてゐるのがわかつてくるにつけ、自分は一という文字さえ書かぬ様に、屏風に書いた文字さえ読めないふりをしていた。だがこの部分で、手塚昇氏は論文「源語及日記より見たる紫式部」に於て指摘し、「謙遜する様な振をしてあらゆる機会を捕えて法螺を吹き立てゝいる」として式部に「偽善的似而非謙遜」の一性格を与えておられる。だがこれは法螺を吹いてゐるのであろうか。「御屏風の上に書きたることをだに読まぬ顔をし侍らざりしを」と、読めぬふりをしていたと正直に書いているのである。式部は決して自分の学識や才能まで謙遜してはいない。ただそれを鼻になどかけていない事を理解して欲しかつたのである。事実、父が「口惜しう云々」と歎いた事も、次の㊩忍んで楽府二巻を彰子にお教え申した事も、決して嘘ではあるまい。式部は幼少より聡明であつたこともわかる。その上家庭の環境や人一倍の

勤勉さも相保つて成長するに及んでは相当の実力の所有者となり、その自負も大きかつたと断定出来るのである。相当のねばりと自信とがあつてこそ、あの大作も書けた訳である。

㊪式部の求道心。式部の才能が買われる買われないにかゝらず彼女の悶々とした不幸感は消すすべもなかつた様だ。㊫「さしあたりて、おのづからむつび語らふ人ばかり、少しなつかしく思ふぞ、ものはかなきや」とつぶやく式部の心には眞の友も居なかつた訳である。こういう式部が最後に到達したものは求道の心であつた。だが、㊬「まして思ふことの、少しもなのめなる身ならましかば、すぎずきしくもてなし若やぎて、常なき世をも過ぐしてまし。めでたきこと、おもしろき事を見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心のひくかたのみ強くてもの憂く思はずに歎かしき事のまさるぞ、いと苦しき」と、行幸の日を控え、人々の喜びの中にあるながら、自分だけがその中に溶け込む事の出来ぬ苦しみ、出家しようかと云う自分の物思ひは世間並の一通りのものではないと云つてゐる。この悩める魂は入信によつて全的に救済され得るものであつたらうか。㊭「唯ひたまちに背きても、雲にのぼらぬ程のたゆたふべきや、うなん侍るべかなる。それにやすらひ侍るなり」。たとえ出家しても自分は死ぬまで、ぐす／＼動揺するだろうと、式部は出家に救いがあるとも思つていなか

聡明であつたこともわかる。その上家庭の環境や人一倍の

たのである。

結 び

以上検討して来た如く、多くの現実の場に於ける式部の態度と、自分を見つめている感想との間には、かなりの開きが感じられる。では人間が無意識のうちに取る態度と、ふと我に返つてからの物思いとは、一体どちらが本当のその人を表わしているか。更にそれが或る程度人に見せるためのものとして意識的に書かれた日記からの表出であるとなれば増々もつて眞実の人間性は計り難い。然しそういう自分を良く見せようとする意識的な筆の動きの中にも本当の著者の性質は何えるものであり、案外無意識な筆のすべりもある筈である。そういう点を中心に結論に入りたい。

先ず式部には常に二つの悩みが附随していた様である。

その一は、(e)―(d)未亡人という不安定さから来る悩み。その二は、(e)―(c)宮仕え女房としての悩み。この二点を中心に(a)から順次見直していきたい。

(a)―(d)公的場所を避けるのも、つまり(人)づれした女になつてしまふという宮仕え生活を疑問に思ふ家庭婦人としての見方から来るのであるとみれば、後者(e)―(c)の悩みの原因となり、これに含まれて来る。

(b)―(d)私的な場合、自分と親しい間柄であれば比較的伸び伸びと振舞い、そういう少数の人々の愛情に慰められている様に見えた。所が、(e)―(c)では、そういうことも全く

るだろうと、式部は出家に救いがあるとも思つていなかっ

「ものはかなきや」と思つているのであつてみれば、現実の場におけるどんな楽しい語らいの中にも式部の心の中では秋風が吹いていたことになる。とすると、この項もあの二つの悩みに連なつてゆくものである。

(e)―(c)式部の性格は「余り出過ぎぬが良い」という彰子の日頃の考え方の影響も受け(4)そういう彰子をも含めた道長一家を式部はこよなく愛し仕え、好意的に眺めている。然し、ふとした機会に、あくまで自分の立場を固く守ろうとして居る全く孤立せる式部を見出したのである。道長一家に対してさえ、かくの如きである。(c)親しい友達に対しては同様でなかつたと、どうして断言出来よう。式部には最後まで自分を許せるものは無かつたのである。これは多分に(c)内省的性格に依るところが多かつたとも思われる。式部の心は常に前二者の悩みに逆もどりしていた様だ。又最後の、(d)はめこまれ役としての式部の位置、これも即ち後者(e)―(c)の原因であつた。と見てくると、

(d)式部の道長一家への溶け込みも、その深さは危うくなつて来るのである。

以上の如く見て来ると、式部の現実の場に於ける動作全てが、物思いの中の二つの悩みに統一されてしまふ。だが後者(e)―(c)の宮仕え女房としての悩みは、結局家庭婦人から宮仕え女房に転身出来なかつた事から由来するものであるとみれば、本当の式部の悩み(心理)は、前者(e)―(d)

③に帰してしまい。実は式部は家庭婦人としての幸福を求めながら、それが満足にいかかなかつた。と言う事になつて来るのである。

(e) ①②③という本心を見抜かれぬため、式部はその態度に多分の虚勢を張り、④元々自信のある文才でカバーしようとした。しかしそれも結局は、④自己の殻の中に閉じ込める原因を作り、文学でさえ慰められない寂寞とした悲しみに逆戻りするのであつた。この式部が最後に到達したのは、⑤当時、貴族社会の否定を支えることの出来るものは宗教以外にはあるまいという考え方に則つたその宗教の道であつた。しかしそれでもなお救われるものではないと言ひ切つてゐるのである。

この様にどこまで行つても満足出来ぬ、到着点を知らぬ式部の考え方、それは内省的な物の観方から発展したものであつたかもしれないが、この考え方こそ式部の性格であつたと結論したい。

(三十四年度卒業)

昭和三十五年度教育実習

実習参観記

毎年のことながら、教育実習に出かけて行く諸君は、真剣そのものであるのが心地よい。授業参観に行つてみると、みんななか／＼よくやつている。が目につく欠点は、声が小さ過ぎたり、おとなし過ぎたりする人が、時々あることである。生来のもので仕方ないかも知れないが、努力で直すこともできよう。また旧字体の漢字を黒板に書いて、生徒から注意をうけている人もあつたようだ。教材の研究はいくらやつても、やり過ぎるといふことはあるまい。この三週間は、技術の向上もさることながら、人間的成長を私は大いに期待している。そして例年、諸君はりっぱにその期待に答えてくれているようだ。

例年実習生諸君の感想をかゝっていましたが、今年も紙面の都合で割愛しました。

(本田義彦)